委員メッセージ

三重県教育改革推進会議委員からのメッセージ

三重県教育改革推進会議会長　山田　康彦

○ 保護者の皆さんへのメッセージ

昔から「子どもは天からの授かり物」と言われてきました。

その言葉は、様々な意味を含んで使われてきました。たとえば、「天から預かった」貴重なものなのだから、大切に育てようという子宝思想とつながって受けとめられてきました。

しかしそれだけでなく、妊娠や出産が人間の思いどおりになるものではないことや、生まれてきても子どもはなかなか保護者の思惑どおりには育ってくれないことを指す言葉としても使われてきました。さらには、保護者というのは、子どもがこの世に生まれてきて、そして一人前になって社会に出て行くまでの世話をまかされているに過ぎないことを意味すると、理解されてきました。

このように、この言葉には、保護者として子どもを大切にするけれども、子どもを決して自分たちだけの所有物としては扱わないという子育ての思想が込められているようです。子どもは、次の世を担ってくれるように、社会にお返ししていく存在でもあるのですから。

新しい教育ビジョンは、学校・家庭・地域が一体となって、子どもたちの輝く未来づくりに向けて総力を結集することを呼びかけています。ぜひ、この「未来づくり」に向けて、ともに手を携えていきましょう。

○ 教師の皆さんそして地域の皆さんへのメッセージ

教育とは、人間社会を維持・発展させていく要になる営みです。親から子へ、子から孫へと世代を連ねていくことによって、人類は継続していくことができます。そのためには、生まれた子どもたちが、親の世代にかわって、次の社会を担っていくだけの力を身につけるように育てていかなければなりません。そのような力量を育んでいくことができなければ、世代更新によって人間社会が存続していくことができなくなるからです。

教育ビジョンは、学校・家庭・地域が一体となって、子どもたちの輝く未来づくりに向けて、自立する力と共に生きる力を育むことを理念として掲げています。

この理念の背景には、子どもたちに、働く力そして人々とともに社会をつくっていく力を培うことによって、次の世を担っていく大人に育っていってほしいという願いが込められています。そのためには、教育関係者の方々には、たんに学力やモラルなどを個別に育てるだけでなく、総体として「次の社会をまかせられる大人に育っているか」という大きな視点から子どもたちを見守り育てていっていただきたいと思います。

三重県教育改革推進会議副会長　向井　弘光

○ 子どもたちへのメッセージ（未来にしっかりした目標を持つ人に）

多くの皆さんは義務教育で9年間、高校で3年間、延べ12年間もかけて勉強します。

大学進学や社会で働くために、必要な基礎学力を身につけるよう配慮され、皆さんが将来、活躍したい仕事や夢（世界で活躍する）の実現に、学校教育で先生が一生懸命に指導してくれます。

この大切な 12 年間に、皆さんがどれだけ真剣に勉強したかで、未来が大きく実りあるものとなります。
このチャンスを生かすのも、生かさないのも貴方次第です。
学ぶことの大切さを今一度見直して下さい。

三重県教育改革推進会議委員

（50 音順　敬称略）

○ 保護者・教職員・教育関係の皆さんへ　上島　和久

生まれたばかりの子どもは、どの子も純粋、無垢で、とっても愛くるしい。しかしながら、その後、社会の状況、育ちの環境、教育を受ける環境などによって、大きく違いが生じてきている。

本来、子どもには、その子にしかない能力や特性と、無限に伸びる可能性がある。昨今、国や県などで教育改革がどんどんすすめられているが、本当に、子どもや教職員、保護者のためになっているのか、今一度考え直さなければならないと思う。よかろうと思ってすすめていることが返って負担に、重荷になっていては本末転倒である。

今回のビジョン策定の審議にかかわり、多くの関係の方々と多くの時間をかけてさまざま検討し、熟議してきたが、これで十分とは決して考えていない。大事にしたいのは、指針を作ることにあるのではなく、この指針をもとにしっかり実践し、さらに充実していくよう改善を図るなど柔軟に対応していく必要があるということを県民の皆様、とりわけ教育に関わっているすべての人たちが共通理解・認識することにあると思う。

子どもたちが将来に向けて夢や希望を持ち、いきいきと主体的に毎日を過ごすためには、大人は何をすべきか、何ができるのかの役割を改めて問い直していかなければならない。 私自身、教育改革推進会議の委員としての活動を通じて、改めて責任の重さを実感するとともに、三重の子どもたちのため、出来るところから着実に「歩」をすすめていきたい。学校（子ども、教職員）に、「元気・活力」が真にみなぎって、明るい笑顔がいっぱい溢れることを目指して・・・・。

○ 未来を創造する地球市民たる子どもたちへ　太田　浩司

今年は尖閣諸島問題があり、ＣＯＰ１０が名古屋で開かれた年でもあります。未来を拓く子どもたちの中期的な教育ビジョンを策定した年として、記憶にとどめやすい年となりました。これらの事象を見ていると、まだまだ人類には克服しなければならない“欲望とエゴ”があり、お互いを尊重し、支えあい譲り合う世界には程遠い感があるように思います。地球をかけがえのない生命として観じ、生物の一つ一つの命を運命共同体として、“もと一つ”として捉える感覚を「あなたたち」が知識としてではなく知恵として学びえることを切に願います。また、各々の人生における課題や全ての地球上の諸問題を解決するには、各々の“エゴと欲望”からできるだけ離れ、より高次なレベルから俯瞰することが何よりも大切であることを学び取ってほしいと思います。それは何も専門的な教育を受けるということではなく、毎日の家庭や友人関係、学校、地域社会で起こってくる諸問題に対し、如何に高次なレベルの視点が持てるかというテーマを持って実践してゆけば得られることです。私はあなたたちが創造する未来を喜びをもって受入れられるよう支援し、共に人類の輝かしい未来を味わいたいと思います。

○ 子どもたちへ　　奥田　清子

常に「批判」する目をもちなさい。だけど、「評論」で終わってはいけない――小学校６年生のときの担任の先生が言われた言葉である。先生が言いたかったことは何か。あれから40年以上たつ今もずっと考え続けている。おそらく、「世の中の出来事に常に関心をもち、自分で考え、そして自らの言葉で発し、行動しなさい。」と言われたのだと思う。少なくとも自分はそういう生き方を心がけてきたつもりである。「三無主義（無気力・無責任・無関心）世代」と言われた私であるが、今の若者はさらに「無抵抗」「無批判」などを加えた「十三無主義世代」なのだそうだ。

今ある「自由」「平和」「幸福」がいつまでも続くとは限らない。情報技術が進化し、コンピュータによる監視や検閲が当り前になり、かつてジョージ・オーウェルが描いた「監視社会」が訪れるかもしれない。現実に世界のあちこちで起こっている争いや核兵器の開発。いつこの「平和」な日本が壊れるかもしれない。いや、「宇宙戦艦ヤマト」の時代のように放射能で汚染された地球になるかもしれない。そうなったら、友だちや家族とのささやかな「幸福」なんて砂のように崩れていく。

これからの未来を創る子どもたち――世の中のいろんなことに関心をもち、自分でものを考える回路をきっちりつくろう！　そして、有言実行！　自らの言動に責任をもつ！　自分たちの未来がいつまでも「自由」「平和」「幸福」であるために。

○ 幼児期の子を持つ保護者・教師へのメッセージ　　加藤　伊子

人格形成の基礎が培われる大切な幼児期の子育ては、心身共に大変なものです。常に不安や迷いが生じ、時には自信がなくなることもあります。私たちの親も同じような思いをし、私たちを育ててくれたのです。子育てをしなくては！！と、一人で背負いこまなくてもいいんですよ。こんなにも近くに子育ての先輩がいるではないですか、悩みを相談しましょう。そして、子育ては、子どもにとっても保護者にとっても楽しいことが一番です。そのためには、①ありのままの子どもの姿を受け入れる。②子どものいいとこ探しをする。③一人でするものではなく、地域や専門機関と、共に学び合い協力しながらする。④子育て中の仲間をつくる。（保護者の横のつながり）⑤肩の力をぬく。（時には手抜きも）そうすることで少しは、子育てが楽しくなってくるのではないでしょうか。

次の世代の地域を担っていく子どもたちを育てていくのです。地域・家庭・専門機関の三者が一体となり、互いの子育て力・教育力を高め合うことが、子どもたちの大きな育ちにつながると思います。地域ぐるみで子どもたちを育てていきましょう。

幼児教育に携わる私たち教師も、厳しい教育情勢の中だからこそ、常にやる気と情熱を持って、目の前にいる子どもたちの心によりそい、家庭・地域・専門機関の連携を図りながら、子どもたちに質の高い教育を提供できるよう努力を積み重ねていきたいものです。

○ 県民の皆さんへ　　川本　健

このビジョンは、時代の変化に応じて特別支援教育や、外国人児童生徒教育、食育といった内容がきちんと整理されていることは当然として、キャリア教育、防災教育、教員の働きやすい環境づくり、幼児期からの一貫した教育などが大きな位置づけを得ているところに、他に比べて違っている部分を見いだします。

特に、一貫した教育について、「子どもたちの目線に立つ」「一人ひとりの指導を校種を越えて引き継いでいく」という考え方を出した点に、わたしは特色があると思います。

多様性を尊重しよう、個々それぞれに価値を見いだそうという社会が来ているときに、教育の社会的側面に軸足を置いた昔のキャッチアップ型へ向かうことなく、このビジョンは、子どもたちの成長という、一人ひとりを大切にしたい、大切にしてほしいという時代変化に即したものとなっています。子どもたちの成長を通して社会的な目標も達成するという現実性を持っています。

今後は、このビジョンを実現するためにしっかりと行動していきたいと思います。

○ 保護者の皆さんへ　　下里　義治

自分たちの子どもにどのような事を教え、また、どのような事を体験させることが良いのかわからないと思います。私たちが、むかし学んだ時代と今の時代では、周りの環境もずいぶん違い、毎日のように新しい情報などが入ってきて、どれが子どもたちにとって良い事なのかもわからない時代です。この様なことで不安が無いように、幼少期から高校生まで幅広く、そして、発達段階においての教育など新しい事がいろいろ議論されてきました。その中で、新しく教育ビジョンができ、安心して教育が受けられると思います。そして、保護者の皆さんも地域や学校と一緒になって、子どもたちを見守ってやることがとても大事です。子どもたちには、親の期待など大きな負担を負わせず、決して甘やかさず、どのような事にも一生懸命になり、夢を持ち、そして、のびのびと育って行くようにする事がとても大事だと思います。日本の社会全体が、そのような環境になってほしいものです。

子どもたちも、すばらしいビジョンの下で教育を受けられることに感謝をし、学校や社会で教育をしてもらっている事に気づき、学ぶ姿勢もきちんとしてほしいものです。

○ 保護者へ教員へ、そして地域の方々へ　　杉浦　礼子

私たち一人ひとりが地球に存在することで社会は形成されています。その一人ひとりが家庭を形成し、学校をはじめとする組織を形成し、地域を形成して一つの繋がりある社会を形成しているのです。次世代を担う子どもたち一人ひとりが属するそれぞれの場で、子どもたちが豊かな時を刻み豊な心を育むことができる社会を構築するためには、家庭で教育すべき事は保護者が教育し、学校をはじめとする組織で教育すべき事は教員をはじめとする社会人が教育し、地域で教育すべき事は地域に住む生活者が教育をする必要があります。他人任せでは子どもは教育することはできません。

複雑化する現代社会において、豊かな心を持ち、地域社会で活躍できる子どもを育成するためには、保護者、教員、地域の方々など一人の子どもに関わる全ての人の協働意識が不可欠なのです。この教育ビジョンには、多様な立場の方々の想いが込められています。この想いを一人でも多くの方に共感いただき、豊かな心を持つ子どもの育成、豊かな社会の実現に向けた行動に参画いただけることを願っています。

○ 子どもたちへのメッセージ　　田尾　友児

むかつく・キレる・いじめ・不登校・・・「今の子どもたちは」と、よく言われるけれど、君たちだけが悪いのではないよ。家庭や地域の環境も日本の環境も、短時間に大きく変わって、人と人のつながりがうすくなってしまったからね。

でもね、まわりの環境のせいにしていると、あなたが不幸になるから、少しでも夢を持ってかんばって、幸せになろうよ。そうしたら大切な人も幸せになるから。自分を好きになると、家族や友達も好きになるよ。

○ 保護者へのメッセージ　　高屋　充子

近頃は温泉ブームということもあり、いわゆる共同浴場に家族連れで訪れる機会が多くなりました。私も温泉が好きで家族、息子たちの家族、ともすれば孫と二人で出掛けることもあります。ある時ゆっくりお湯に浸かっていると若い親子が浴室に入るや否や、湯船にどぼん！「あなたのお家ではないのよ」と言いたかったくらい体にお湯をかけるわけでもなくすぐさまお湯に入ってしまいました。

保護者自身が子どもの頃にしつけられていなかったら、子どもにしつけられずこの行動は当たり前になります。社会性は、子どもと一緒にバスや電車に乗るなど公共の場に於いて、迷惑をかけてはいけないことや、おもいやることを教えることができました。今や公共の場で、多くの人の中でしつけを行っている風景に出合うこともありません。

茶席の禅語で「啐啄同時」という言葉があります。雛鳥が生まれようと卵の内側からコツコツ突くことを「啐」。親鳥は雛が生まれようとしている事を知って外からコツコツ突くことを「啄」と言います。親と子が間髪入れずに同時に殻を突き合う、親子でしかできないこの絶妙なタイミングを「啐啄同時」とあります。人間にも「しつけどき」の「啐啄同時」があるように思います。

○ 子どもたちへのメッセージ　　多喜　紀雄

地球という素晴らしい星に生まれた私たち、与えられた一人ひとりのかけがえのない「いのち」を、共に精いっぱい豊かに生きていきたいものです。すべての子どもたちが人として成長していけるのは、教育をおいて他にありません。この教育ビジョンが皆さんのこれからの歩みに大いに役立つことを期待しています。

自分の子ども時代を振り返って大切だと思う二つのことをお話させて頂き、私のメッセージとします。

一つ目は、子どもの時に、ぜひ自分の好きなことや得意なことを見つけ、大切に育てていってほしいということです。読書、音楽、美術、スポーツ、国語、理科、算数、その他どんなことでもよいのです。好きなことや得意なことは心に自信を育て、有能感の獲得へとつながっていきます。さらに、大人になって仕事に活かされ、また、趣味となって心を豊かにし、生きがいとなっていくことでしょう。

二つ目は、人には誰でも不得意なことや自信の持てないことがあるものです。その多くは学習や経験を通して改善されていきますが、時にはそういかないこともあるかもしれません。その時には、勇気を出して信頼する先生にありのままの自分のことを相談するとよいと思います。きっとよい方向に導いて下さることでしょう。私も子どもの時、人前で発表したり歌ったりすることが大の苦手で、長い間大変辛い思いをしたものでした。

今回の教育ビジョン、幼児期からの一貫した教育の推進の中で「子どもたちの長所や課題を、学年や学校種を越えて引き継ぎ、長所を伸ばし、課題を克服する取り組みを、時間をかけて行っていく」との方針が示されました。こういった取り組みを通して、皆さんが一層心豊かで、たくましく成長されることを心から願っています。

○ 保護者・教師へのメッセージ　　中津　幹

今回のビジョンは、子どもたちの目線に立って、また、育ってほしい子どもたちの姿を心に描きながら、大勢の方々の智恵と思いが集められて出来上がりました。このビジョンを実現していくのは、保護者であり、教師の力に他ならないと思います。

学校教育のなかで学力向上の重要性は言うまでもありません。しかし、平均寿命が男女とも８０歳を超えようとしている今、学校卒業後の長い人生をいかに生きるかは、さらに大切なことだと思います。いろいろな面で、保護者や教師自身の生き方が問われている時代です。

この競争社会にあって、人間として何が一番大切なのかを自分に照らして考え、保護者と教師が子どもたちにとっての目の前の「鑑」であってほしいと私は願うのです。

人生は喜びと悲しみ、不安と安らぎの交錯の連続ですが、その不確かさのなかにあっても、保護者との温かい絆や教師との信頼に満ちた交わりがあれば、人生をたくましく、心豊かに歩んでいくことができるのです。子どもとのこのような関わりを大事にし、誰もが幸せに生きられる社会を築く人間を育んでほしいと思います。

○ 教育にかかわるすべてのおとなのみなさんへ　中村　武志

多くの人たちが、長い時間をかけて議論しつくりあげた教育ビジョン。目先の結果のみが重視される風潮の中、「子どもたちを信じる」「子どもの目線に立つ」という教育の当たり前の基本に立ち返ったことは、極めて重要なことだと思います。

このビジョンに基づき、実行ある施策が着実に実施されることはもちろんですが、教育関係者はもとより、子どもとかかわるすべてのおとなが、学びの中心にいる子どもたちから、「信じてもらっている」「自分たちの目線に立ってもらっている」と言われなければなりません。評価されるのは子どもたちではなく、おとなたちだということを忘れず、みんなでがんばっていきましょう。

○ がんばれ先生　西田　寿美

子どもたちは、対人関係のなかでたくさんのことを学んで成長していきます。学校という大きな対人関係はストレスにもなるでしょうが、生涯忘れない思い出の場にもなります。

昨今、学校集団におけるマイナス側面が強調される傾向がありますが、たくさんの出会いのなかで興味の世界が広がり、新しい世界を知ることができるのも学校です。

子どもにとって先生はそういう世界への水先案内人です。保護者からの自立の土台作りも、学校時代の先生との出会いからと思えることもあります。いろいろな大人がいるという実体験もやはり学校でしょう。保護者にとっては大事な自分の子どもを預けるのですから、担任には過大な期待を寄せたくなります。考えれば大変な仕事です。聖職者と祭り上げられる一方、人間的な弱さは容赦なく批判される職場でもあります。

批判にめげないでください。子どもに大きな影響を与える仕事であることは、誰もが認めるところです。先生という職業を選んだ若き日の夢をもう一度思い出して、がんばれ先生！

○ 大人の方々へ　浜辺　佳子

モクモクでは食農教育を実施しています。以前フランスでの研修により食育の重要性を目の当たりにしました。フランスでは幼児期から食育が実践されており、あたたかさ、感動、動植物の愛情などを育み酪農体験や農作業体験を必須と考え実践されています。それが自給率の高さやフランス人のいい意味でのプライドの高さと郷土を愛する力になっていると考えます。フランスは、日本での取組みの可能性について「食農教育ファームの教育的価値を日本は持つべき」と指摘しています。「市民が豊かで安心して暮らせる社会の形成と、継承すべき優れた文化や伝統的な価値あるものを見極めるための根本である」と推進しています。モクモクの学習に参加する子どもは学校での知識に牛のカラダに胃が４つあるなどは知っているのですが、その子が茶色いジャージー牛を見て「この牛は茶色いからコーヒー牛乳を出すの」とまじめに質問しました。ハムが豚であると知らない大学生や、大人でも乳牛は出産しなくても牛乳がでると思っている現状があります。知識があってもズレが生じている。子どもたちに本物の食育の推進をしていきたいと感じています。

○ 教職員のみなさんへ　　日沖　靖

私が 40 年前に受けた授業は自由そのものだった。田植え前の田んぼでクラス対抗の泥団子のぶつけ合い。川を堰き止めただけの水泳教室。先生の自作の教材ばかりの国語の授業。漫画の紙芝居の英語の授業。お天気の日は教室を出て、校庭や森の中での青空授業。一番楽しみだったのは、担任の先生が宿直の時、宿直室での先生の昔話。先生に素手で叩かれるのはましなほうで、木製の三角定規の角は痛かった。しかし、生徒と先生の距離が近かった。先生の本気さが肌で感じ取れた。

牧歌的な昔とは比較にならないかもしれないが、今の先生が気の毒に思えてならない。ほとんどの先生は教育を志し、誇りをもって教壇に立っているのに、熱心な先生は心を壊し、割り切りの早い先生は生徒との間に線を引く。教育現場に情熱と活気が溢れるのを期待する。

○ 保護者へのメッセージ　　松岡　美江子

現代社会がますます複雑化する中で、親子に絡む犯罪の増加や家庭崩壊など子どもたちを取り巻く環境は一段と厳しくなっているのを感じます。子どもたちは日本の未来を担う大切な宝であり、生まれてくる時は皆、天真爛漫で無垢な状態でこの世に生を受けます。

成長と共に人格や個性が形成されますが、そこに一番大きな影響をあたえるのは保護者であり、特に3歳までに保護者が子どもにどのように関わってきたかが、とても重要であるといいます。まさに「三つ子の魂百まで」で、この時期にしっかりと充分な愛情を注ぐことが、子どもの健全で豊かなパーソナリテイーの形成に欠かせないと考えます。

生む喜びの裏には生む責任があり、育てる喜びの裏には育てる責任があり、いずれも表裏一体です。保護者であると同時に人間として、子どもの教育やしつけの重要性に気づき、その責任をまっとうするために、優しく豊かな心で幼児期にしっかりと愛情を注ぐことが必要です。その上で、社会の集団生活に送り込めば、子どもたちの輝く未来づくり教育ビジョンの実現がより確かなものになると考えます。

○ 保護者の方へのメッセージ　　皆川　治廣

「教育」とは、一般に、私たちおとなが先人の知識や技術を子どもたちに教え、子どもたちの個性や能力を育てることと言われています。しかし、私は、「教育」とは「共育」や「協育」と考えています。なぜなら、子どもたちは純粋な目で物事に触れ、そして、考えることが多いので、逆に私たちおとなが子どもたちに教えられ、時には励まされ育てられることもしばしばあるからです。おとなと子どもが一緒になって教え教えられ、育て育てられること、これも「教育」の一つの理念ではないでしょうか。「子どもとともにおとなも成長する」、「保護者が変われば子どもも変わる」、「教育」を、おとなからの目線でなく、子どもの目線でもう一度見つめ直すことも必要でしょう。

○ 子どもたちへ　　脇田　三保子

三重県の子どもたちは三重県の宝だから、子どもたちが、いつも「かがやく笑顔」でいられるようにという思いで、この教育ビジョンづくりに関わらせていただきました。

・日の出、日の入りを見たことがありますか。冬の夜空にオリオン座を見つけましたか。空の広さ、海の青さ、心地よい風、小さな草花、私たちのまわりには美しい自然がいっぱいあります。でも、あなたはそれに気付く余裕をなくしていませんか。人間は自然の中から生み出された生物ですから、自然の中でこそ心と身体が浄化されて元気になり、ゆとりとやさしさが生まれるのです。

・「人と話し、笑い合うことで心の治癒ができました。いっしょにいてくれてありがとう。」小学校6年生でいじめられ、ほとんど中学校へも登校できなかったAさんが、卒業新聞の寄せ書きにこう書きました。彼女は自殺も考えたほど苦しみましたが、友達やまわりの人に支えられて元気になることができたのです。人は一人では生きていけません。人と人とがつながること、メールではなく、きちんと向き合って話し、笑い合うことが大切です。もちろん、いじめは絶対ダメです。そして、命を大切に、「かがやく笑顔で」。

三重県教育改革推進会議部会委員

（50 音順　敬称略）

○ 子どもたちへ　岩崎　祐子

私たちは、いろいろな人と一緒に生きています。家族、ご近所のかた、同じクラスの友だち、隣のクラスの友だち、先生たち・・・。そして、私たちのまわりには、いろいろな人がいます。みなさんより、小さな子どもたち、大人、お年寄り、スポーツが好きな友だち、スポーツは苦手な友だち、みなさんと違う文化で育った友だち、みなさんと違う国で育った友だち・・・。

いろいろな人と一緒に生きる社会で、みなさんには、「もし、自分が相手の立場だったら、どうかな?」と、相手のことを考えてもらいたいと思います。そして、「困っていることはないかな?」と、相手のことを考えてもらいたいと思います。

みなさんが生きる世界はどんどん広がっていきます。みなさんは、これからたくさんの人に会うでしょう。相手の立場を思いながら、まわりの人と接していくことができれば、私たちは本当に心の豊かな社会で生きることができると思います。

○ 地域の皆さん・大人へのメッセージ　宇田　克巳

（地域の皆さんへ）

学校が無くなるというのは地域の文化が１つ消えていくことを意味します。特に地域の高校の状況は良くも悪くも、よく見えます。希望者は少なく、「高校がなくなっても仕方がないだろう」という気持ちが、学校が無くなることにつながっていきます。

無くなる方向に動き出してから、無くさないようにと言うのは無理です。したがって「もし無くなればこの地域はどうなるのか」を考え、「地域の子どもたちにとって何が良いのか」を、地域みんなで考えることが必要なのだと思います。学校と地域の文化は切っても切れないものだと考えます。今、自分には、自分たちには、子どものために何が出来るのかを考えて欲しいと思います。

（大人へのメッセージ）

子どもは大人の言動をよく見ています。したがって、子どもの見本となる言動をすることが必要です。しかし、人間完璧なものではありません。１つ１つ揚げ足を取り上げられれば、困る部分は出てくるでしょう。そこで完璧な人間ではないが、大人として何事にも「誠実」であることが大切です。

そして、子どもの前で大人の批判はしない方が、子どもの教育にとって望ましいと考えられます。「こんな大人になって欲しい」という希望を子どもに伝え、責任ある言動を心掛けることが必要であると思います。

○ 大人のみなさんへのメッセージ　加藤　達夫

理科の授業で、はじめにこんなことを子どもたちに投げかけてみます。「どうしてトマトは赤くなるのか?」・・・子どもたちの発想はみごとなもの。「太陽に当たっているから」「恥ずかしがりやだから」「だれかが色をぬっている!」「目立ちたいから!」などなど。大人の発想とはいかに限定されたものなのかと考えてしまいます。いろいろなことに興味を持ち、好奇心旺盛な子どもたちを目の前にして、わたしたち大人はどのように関われば子どもたちの豊かな学びにつなげることができるか・・・これまでの自分自身を振り返りながら部会に参加していました。

社会の大きな変化とともに、子どもたちをとりまく環境も変わりつつあります。確かに、その影響を受けてか、子どもたちの生活背景も様々で、学校現場では一人ひとりへの対応が必要です。子ども自身が本来もっている力を育み伸ばすためにも、学校・家庭・地域が連携し、地域の教育力を生かしながら子どもたちの成長に関わっていくことが大切だと考えています。

三重県教育ビジョンが、「子どもたちを信じ」「学校・家庭・地域が一体となって」という基本理念のもと、三重の教育の大きな前進につながることを期待します。

○ 子どものそだちを支援している人たちへ　栗原　輝雄

朝起きてみると、前日からの強い風雨のために、自宅庭のガーデンシクラメンの花の茎が、どれもみな力なく地面に倒れていました。とてもショックでした。でも、その後のあたたかな陽射しの中で、その花の茎たちは数日後には再び空に向かってまっすぐに伸びていました。しかも、その後の、この地方にしては珍しい大雪の時にも、細い茎と小さな花びらで、降り積もってできた雪のかたまりさえもしっかりと支えているのでした。人間の育ちにも通じるものがあると強く感じさせられました。あたたかな陽射しを存分に浴びてこそ、一人ひとりの子どもの心は大きくふくらみ、また、仮に倒れかかったり萎えかかったりしたときでも、再び青い空に向かって大きく身を伸ばしていくことができるのだと。子どものそだちの支援にかかわる人たちは、このあたたかな陽射しの役割を常に担っていくことを求められているのだと今、改めて考えさせられています。

○ 保護者へのメッセージ　今野　明子

学校教育は、決まった時間内に一定のカリキュラムに従い、一人の先生が数十人の生徒を教える集団教育です。一人ひとりの子どもの全人格を育て上げることは、不可能に近いと言えます。しかし、家庭は、子どもの全人格を教育する場所であり、基礎であり基盤です。とりわけ、保護者は、子どもにとってかけがえのない先生です。良い子に育てたいと思うのならまず、私たち保護者が手本となるような行動や物の見方を示していかなければなりません。どんなに、時代が進んでも、変わっていいことと変えちゃいけないことがあると思います。子どもだけでなく私たちは、皆、宝物を持って生まれてきます。育つ環境で輝きがなくなったり見えなくなったりします。ダメな子は、一人もいないのですから。本来、持って生まれた宝物をキラキラ輝かせるために明るく、優しく、暖かい家庭を築いてまいりましょう。

○ 管理職へのメッセージ　杉嶋　克之

子どもたちは、今後、ますますグローバルな社会を生きていくことになります。異なる文化や言語をもつ多様な仲間と共に生活し、共に学ぶことによって子どもたちの視野も広がり、共生社会を実現する資質もはぐくまれます。また、年々、学校は地域に開かれ、保護者や地域の人材や文化力を十分に生かした学校教育環境づくりが進められております。学校は、人と人の「つながり」をはぐくみ、地域を活性化させる大きな資源になるのではと考えております。

今回の教育ビジョンにも、これらのことは反映されておりますが、まず、管理職の皆さんにしっかり理解していただき、組織として運営し、改善し、時代に応じた学校づくりをしていかなければならないと思っています。

「もし高校野球の女子マネージャーがドラッカーの『マネジメント』を読んだら」という書籍が発売から１年近く常に１位、そして、１３０万部のベストセラーなりました。

その内容に、「真摯さ」＝「逃げないこと」とあります。我々は、子どもの無限の可能性を引き出すために、「仕事」でなく「志事」をしなければならないと考えます。

○ 子どもたちへのメッセージ　鈴木　一良

新しいことに挑戦するのはとても不安だけれど、失敗を恐れずにいろいろなことに挑戦してください。成功することはとてもすばらしいことだけど、失敗することはもっと素敵です。だって、そこからまた新しい発見があるかもしれないから。いっぱい失敗して、どんどん新しい発見をして、自分らしい人生を歩んでいこう。

○ 先生方へ　辻　貢

2007年に特殊教育が特別支援教育に移行しましたが、その数年前から小・中学校の障害児学級（特別支援学級）や高等部を中心に障害児学校（特別支援学校）で学ぶ子どもたちが急増するような状況のなか、今後の「障害」のある子どもたちの教育のあり方についての議論に主に参加させていただきました。

わたし自身は、差別と選別に苦しみ、そこからの解放を訴える「障害」者たちとの出会いをはじめとするさまざまな経験などから、「ともに生きる社会は、ともに学ぶ学校から」という思いのもと、インクルーシブ教育の実現こそがこれからのあるべき姿であると考えています。そのためには、地域の小・中学校や高等学校における組織としての教育力向上にむけて、行政的支援が何よりも必要であるという立場で意見を述べてきました。

さまざまな議論の結果、インクルーシブ教育に向かう方向性が少なからず盛りこまれていることはたいへん嬉しく思っています。今後の県の率先実行を心より期待するとともに、わたし自身も議論に参加した一員としての責任を胸に、精一杯がんばっていきたいと考えています。

○ 保護者と教師と大人たちへのメッセージ　東福寺　一郎

私は前回の教育振興ビジョン策定にも参画させていただきました。当時小学校低学年であった若者たちが、現在、私が教えている学生たちです。その若者たちを前にして、11年前の答申があれで良かったのかと自問自答していますが、割り切った答えは出てきません。

10年というのは短いようですが、この間に国内外で実に様々なことが起こり、それらがいずれも私たちの暮らしに直接的な影響を及ぼしてきました。11年前には同時多発テロもサブプライムローン問題も想定することができませんでしたが、それらが今の学生たちの人生や生活にいろいろな形で影を落としています。

もちろん、これからの10年間に何が起こるのか、三重県がどのようになっていくのか、誰にもわからないことです。確実なことは、今の子どもたちがその10年間を生き抜き、さらにその後を生きていくための準備をしていかなければならないことです。大人社会が生み出してきた閉塞感の中に埋もれることなく、たくましくそして自分らしく生き、なおかつ他者と共存していく力と感性を培ってほしいと願ってやみません。

完成したビジョンも次の瞬間にはどこかに穴があき、綻びが出てくるかもしれません。社会が日々変化していく以上、これは避けられない宿命です。ただ、このビジョンの底流にある委員各位の考えや思いが受け継がれ、保護者や教師をはじめ、大人たちが子どもたちのために柔軟にそして適切に行動していくことが大切だと考えています。

○ 教員へのメッセージ　濱口　曜嗣

特別支援教育は、当然ながら教育であるという観点を大切にしなければいけません。

そうであるからこそ、

「教育のその目的」

「子どもたちが意欲的に学習する方法」

「子どもたちがどういう教育を、どういう学校を望んでいるのか」

という問いに、自問自答を絶えず繰り返し、多様な個々の児童・生徒に適した教育を追求することが必要です。

教育ビジョンに沿って、知的能力、運動能力、生活能力の向上のため、一人ひとりの児童・生徒への絶え間ない研究と実践を、児童・生徒達の豊かな未来を作るために期待します。

○ やがて社会に出る子どもたちへ　林　克昌

幼稚園や小学校の子どもたちに「大きくなったら何になりたい?」と聞けば、「野球選手」や「サッカー選手」、「ケーキ屋さん」「お花屋さん」などとの答えが多いのでしょうか。中学生や高校生に、「どんな職業に就きたい?」と問えば、どのような答えが返ってくるのでしょうか。誰しも年齢を重ねるに従って、小さい頃に憧れた職業に就くことが簡単ではないことを体験しながら大人になっていきます。

子どもの頃に憧れた職業に就けても就けなくても、自分の生活を支え、自分が独り立ちしていくために「働く」ことが必要になります。確かに働くことは辛いことやキツイこともありますが、困難を乗り越えながら自分の技術や経験を磨くことで得られる満足もたくさんあります。そしてなによりも、「働く」ことが世の中の役に立っているということを誇りに思ってください。

○ 保護者と大人へのメッセージ　松岡　典子

思春期の子どもたちへ「いのちを守る性の話」と題した講座を行っている者として、現代社会の子ども達の「性」については、我々が育ってきた環境とは大きく違った状況にあると強く感じています。特に「情報」という側面からは従来では想像もつかないツールが利用でき、その量や内容も想像を超えるものがあります。このような現代社会にも関わらず、こと、この問題は、個人の倫理意識や性役割など従来の価値観からまったく動かない状況で語られる部分があります。わが子の性非行にも関心を持たない保護者や、「うちの子に限って･･･」と言い切る保護者など、さらには健全な性への興味すら否定される子どももいます。この巨大なる情報化社会においては、子どもたちはどこから性の規範意識を学ぶのでしょうか。この時代だからこそ、保護者や大人が子どもたちを等身大のまま受け止め、何か問題が起きたら決して逃げず、真正面から向き合う覚悟が必要なのではないでしょうか。そして「駄目なものはだめ」といえる大人であることが、実は求められているのではないでしょうか。「性」の問題はその人間の「生」の問題であるともいわれるのですから。

○ 子どもたちへのメッセージ　萬濃　正通

みなさんは、北の大地「北海道」の名前の由来を知っていますか。北海道は、江戸時代に蝦夷地と呼ばれてアイヌの人々が暮らしていました。「カイ」＝「海」（加伊）は、アイヌの人々を表す言葉で、「北にあるアイヌの人々が暮らす広い大地」という意味があります。実は、「北海道」と名付けたのは、私たちの暮らす三重県を代表する偉人の一人である「松浦武四郎」なのです。

武四郎の生きた江戸時代は、誰もが平等な社会ではありませんでした。そのような時代に、武四郎はアイヌの人々への正しい理解と、文化を尊重することを、命をかけて訴えています。多様な価値観を受け入れ、不正を許さず、自らの信念に基づいて行動した姿は、今の私たちがあるべき姿であると思います。

私たちの郷土「三重」は、松浦武四郎の他にも、松尾芭蕉、佐佐木信綱、御木本幸吉をはじめ、多くの偉人を世に生み出してきました。みなさんには、先人の業績から、自分の生き方を学ぶとともに、「三重」に育ったことを誇りとし、郷土の未来をたくましく切り拓いていってほしいと思います。

未来の「三重」を創っていくのは、あなたたちなのだから・・・

○ 広く教育に携わる方々へ（また保護者の皆さんへ）　村林　守

子どもたち一人ひとりは、無限の可能性をもっています。

ところが、今の子どもたちをみますと、その可能性がじゅうぶん開発されないままに大人になり、社会にもうまく適応しきれていないように感じます。

一人ひとりの可能性を見出し、それを引き出し、伸ばすことが、私たちの務めではないでしょうか。

大人が好ましいと思う「型」にはめこもうとするよりは、一人ひとりの可能性が伸びていくのを見守ることもまた、たいせつなのではないかと思います。

○ 教員へのメッセージ　脇田　愉司

現在、わが国では、国連で採択された障害者権利条約の批准に向けて国内法の整備が図られていますが、この条約による「インクルーシブ教育」の趣旨は、「一緒の場で、必要な配慮」をすることです。多様に分かれた場で「共に学ぶ」ことが可能であるかのようにいっていることは、とても疑問に思います。また、教職員の資質向上で教員に必要なのは、障がいの知識ではなく、多様な人間を尊重し、誰も排除しない（ソーシャル・）インクルージョンに関する知識と考えます。

１０年先を見据えて、インクルーシブ教育の理念を掲げる「教育振興ビジョン」にしていくのであれば、現在の教育条件を改善して合理的配慮の展望をもつ、自治体レベルの「インクルーシブ教育推進プラン」等を立案して実行に移していくべきあると考えます。

関連して、今よく言われる、「教育の個性化」は多様性を生み出すのではなく、個性による階層化と個性自体の階層化を通じた一元的支配をもたらす恐れがあり、最近では、「多様性」とは、多様性の承認ではなく、多様なものをまとめて筋道をつけたりする「マネジメント能力」にすり替えられています。

こうした「多様性の戦略」を通じて失われていくのは、もって生まれた生命・身体・能力の差と教育投資のための資産や環境を、不平等（合理的配慮の不在）として捉える視点です。そこから、「能力の共同性論」（個人の能力・努力自身が私的所有ではなく、他者の「おかげ」によっている）や「１３歳論」（自分で望むライフプランが可能に）、「配慮の平等」（すでに配慮されている人々と、まだ配慮されていない人々がいる）という視点を獲得したときに、公平や平等についてのセンスは一気に良くなるのではないでしょうか。